

令和元年度 全国高等学校総合体育大会(鹿児島)審判員報告

C1:男子体操競技

男子審判長 近藤昌夫

令和元年度全国高等学校体操競技選手権大会は、7月31日～8月2日に鹿児島県鹿児島市総合体育館（鹿児島アリーナ）において開催されました。競技は2017年版採点規則および平成29年度版高等学校男子適用規則と男子体操競技情報27号追加情報Ver2までを採用しました。FIG規則の2017年版が施行され3年目になりました。施行後、FIGからの追加情報を男子体操競技情報27号版として通達いたしましたところ、現場の選手や監督の皆様には大きな問題もなく浸透されているように感じました。会場練習の日に桜島の噴火が起り、噴煙で鹿児島空港に着陸できない状況に陥り、一部の選手が時間を組み替えて会場練習にあたっていました。無事予選・決勝を行うことができ胸をなでおろすことができました。

団体決勝は2年連続で市立船橋高校が優勝となりました。開始種目から最終種目にいたるまで安定した試合展開で、難度の高い技を取り入れながら、実施減点をできるだけ抑えてEスコアを高める戦いでありました。特に終末技において着地を止めにくいこうとする気迫が会場全体に伝わってきました。

個人総合では、北園丈琉選手(清風)が87.10を獲得して優勝しました。第2位には橋本大輝選手(市立船橋)が84.85、第3位には土井陵輔選手(関西)が83.95のスコアでメダルに輝きました。上位3名は今年の世界選手権または世界ジュニア選手権大会の代表選手であり、個人の実力を出し切り上位に名を連ねることができました。

団体予選通過16位の得点は215.40、17位が214.65でありその差は0.75でした。昨年よりもボーダラインが6点ほど下がりましたが、優勝得点も3点ほど下がっているため、これはEスコアが年々厳しくなっている影響を受けた形となりました。

昨年に引き続きつり輪の一人30秒アップをE審判にお願いして計測しましたところ、状況としてほとんどの組が時間を守れておりました。つり輪は時として難度の認定や難度不認定から起こるグループ不足のために、Dスコア算出に時間がかかることがありますので、選手・コーチのご協力ですmoothな進行ができたこと感謝いたします。

競技中に起った問題として、今年もゆかの絨毯のつなぎ目が剥がれやすいということがありました。幸運にもつなぎ目に足を入れてしまい演技に影響することはありませんでした。器具の不具合についてはできるだけ演技前に解決し、選手に事故・怪我がないことを徹底することが必要になってきます。

最後に、大会実行員会、高体連関係役員、鹿児島県体操協会や補助役員、その他大会に携われました多くの皆様のお陰により素晴らしい大会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

《ゆか》

D1：三富 洋昭

＜決勝における D スコア分布（85 名）＞

6.1	6.0	5.9	5.8	5.7	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2
1 名	4 名	1 名	1 名	4 名	7 名	5 名	6 名	9 名	8 名
5.1	5.0	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.3	4.2
6 名	8 名	5 名	5 名	1 名	5 名	1 名	3 名	2 名	0 名
4.1	0.0								
2 名	1 名								

＜決勝における E スコア分布（85 名）＞

8.60	8.40	8.35	8.25	8.20	8.15	8.10	8.05	8.00	7.95
1 名	4 名	2 名	2 名	7 名	4 名	2 名	3 名	3 名	3 名
7.90	7.85	7.80	7.75	7.70	7.65	7.60	7.55	7.50	7.45
8 名	3 名	7 名	4 名	2 名	3 名	3 名	4 名	2 名	2 名
7.40	7.35	7.30	7.25	7.10	7.00 以下				
3 名	1 名	2 名	3 名	1 名	6 名				

＜決勝における着地加点＞

後方伸身宙返り 3 回ひねり (D 難度)	11 名
後方伸身宙返り 7/2 ひねり (D 難度)	1 名

＜終末技で実施された技とその数（決勝 85 名）＞

D 難度：後方伸身宙返り 3 回ひねり（59 名）、後方伸身宙返り 5/2 ひねり（21 名）、

後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり（1 名）

C 難度：後方伸身宙返り 2 回ひねり（2 名）、後方かかえ込み 2 回宙返り（1 名）

＜実施された高難度技とその数（決勝 85 名）＞

F 難度：前方屈身 2 回宙返りひねり（1 名）

E 難度：前方屈身 2 回宙返り（11 名）、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり（1 名）、前方宙返り 5/2 ひねり（19 名）、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり（11 名）、後方伸身宙返り 7/2 ひねり（5 名）

＜実施された 0.2 加点の宙返り連続技とその数（決勝 85 名）＞

D 難度+D 難度：後方伸身宙返り 5/2 ひねり～前方伸身宙返り 2 回ひねり（4 名）

＜種目別上位 3 位選手の得点詳細＞

第 1 位 北園 丈琉（2 年） 大阪府・清風高校 D：6.0 E：8.40 決定点 14.400（着地加点）

第 2 位 平松 航河（2 年） 千葉県・市立船橋 D：6.1 E：8.15 決定点 14.250（着地加点）

第 3 位 岩澤 将英（3 年） 宮城県・明成高校 D：6.0 E：8.20 決定点 14.200

第 3 位 土井 陵輔（3 年） 岡山県・関西高校 D：6.0 E：8.20 決定点 14.200

第3位 井上 慎友（3年） 鹿児島県・市立出水商業 D：5.6 E：8.60 決定点 14.200（着地加点）

<減点箇所とその傾向>

- ・ひねり系の技におけるひねり不足（0.1 or 0.3 or 0.5）
- ・着地の姿勢、頭が下がる、腰の位置の低い着地
- ・着地時止まることなくすぐに次の動作に行った場合は減点となる。（0.1 or 0.3）
- ・着地の準備が見られない。着地の際の足の開きは止まっても減点となる。（0.1 or 0.3）
- ・空中姿勢、足割れ、開き
- ・静止技の捌き（姿勢、時間）
- ・十字倒立（肩の高さ）、脚上拳、マンナ（腰の位置）、ロシアン転向の姿勢

<今後に向けて>

全体的には、丁寧な捌きをした演技が数多く見られた。ゆかにおいては着地箇所が複数あることから着地における減点が多くなっている。一か所の着地で着地準備、着地姿勢（頭の位置、腰の高さ）等で0.5～0.7ほどの減点になってしまう演技が多くあった。しっかり着地をまとめた演技は高評価につながっていた。Eスコアが7.5の演技になるか、8.5の演技になるかは着地にかかっているといってもよいだろう。さらにグループIの技の捌き方を丁寧に行い、静止が要求されている技はしっかりと静止をする必要がある。倒立の姿勢や旋回技の姿勢、十字倒立の肩の高さなどしっかりとした捌きを行えば更に高得点が期待できるであろう。他におもな減点要因は、ひねり系の技のひねり不足である。これに関しては足先の向きが重要で、しっかり足先が前を向いて着地がされているか、または次の技につながっているということが見られている。最終的には演技の出来栄として、技の雄大さ美しさがある減点の少ない実施が求められる。

《あん馬》

D1：大門 景

<決勝におけるDスコア分布（85名）>

6.0	5.7	5.5	5.4	5.3	5.2	5.1	5.0	4.9	4.8
2名	1名	2名	2名	1名	1名	4名	6名	2名	6名
4.7	4.6	4.4	4.3	4.2	4.1	4.0	3.8	3.7	3.6
2名	6名	8名	6名	6名	3名	6名	7名	2名	4名
3.5	3.4	3.2	2.9	2.5	2.3	0.0			
1名	2名	1名	1名	1名	1名	1名			

<決勝におけるEスコア分布（85名）>

8.90	8.85	8.75	8.60	8.50	8.45	8.35	8.30	8.25	8.20
1名	1名	2名	1名	1名	3名	1名	2名	4名	4名
8.15	8.10	8.05	8.00	7.95	7.90	7.85	7.80	7.75	7.70
4名	1名	2名	5名	3名	5名	1名	2名	2名	3名
7.65	7.60	7.55	7.50	7.45	7.35	7.30	7.15	7.10	7.05以下

2名	1名	1名	1名	5名	1名	4名	1名	1名	20名
----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

<実施された高難度技とその数（決勝 85名）>

F 難度：ブスナリ（1名）

E 難度：ウ・グォニアン（1名）、ショーン（1名）、アイヒホルン（1名）、E フロップ（19名）、開脚旋回縦向き 3/3 前移動（6名）、開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動（5名）下向き逆移動倒立 3/3 移動 1 回ひねり下り（9名）

D 難度：リーニン（1名）、逆交差 1/4 ひねり倒立経過下ろして開脚支持（30名）、逆交差 1/4 ひねり倒立 1/4 ひねり逆把手に片腕支持逆交差入れ（1名）、モギルニー（1名）、ピネーロ（1名）、横向き旋回 1 回ひねり（2名）、ロス（23名）、トンフェイ（4名）、D フロップ（20名）、D コンバイン（27名）、マジヤール（17名）、シバド（52名）、下向き逆移動倒立 3/3 移動下り（48名）ロシアン 1080° 転向下り（2名）

<種目別上位 3 位選手の得点詳細>

第 1 位 橋本 大輝（3年） 千葉県・市立船橋 D：6.0 E：8.75 決定点 14.750

第 2 位 北園 丈琉（2年） 大阪府・清風高校 D：5.5 E：8.90 決定点 14.400

第 3 位 安達 太一（3年） 千葉県・市立船橋 D：5.5 E：8.85 決定点 14.350

<減点箇所とその傾向>

- ・交差倒立、倒立を経過する終末技については足先が 31°～45° 下がったものは大欠点とし、45° 以上足先が下がったものは不認定（大欠点）とした。
- ・倒立を経過する終末技で、倒立が傾き倒れかけながら咄嗟にひねりを加える捌きは、倒立位に納めてコントロールされていないとみなし、ひねりの部分を認めずその前までの難度とした。
- ・グループⅡ、Ⅲの技において採点規則に記載してある技に繋がることができなかった技は、不認定とした。
- ・縦向きの移動技は、角度の逸脱、腰のまがり、膝・つま先のまがり等で 0.1～0.6 程度の減点があった。また、縦向き移動技の前後にある馬端中向き縦向き旋回でも角度の逸脱が見られた。
- ・交差倒立技は、腰まがり、力を使う捌きなどで 0.2～0.8 程度の減点が見られた。

<今後に向けて>

今大会では、多くの選手が交差倒立を行っていた。しかしその捌きはほとんどが力を使った実施であった。腰がまがり、力倒立のように捌く実施には、多くの減点が伴うということを理解し練習に励んでいただきたい。良い実施の選手も見られるので、これからより増えることを期待したい。また、ほとんどの選手が行う 3 部分の縦向き移動技での減点が多く、特にシバドの角度の減点、マジヤールの把手間での角度や膝まがりの減点がある選手が多い印象であった。開脚旋回で行う選手も数名いたが、開脚でもシバドでは角度の減点がある選手がほとんどであった。

全体を通して、今大会は旋回や交差の質が素晴らしいと言える選手は少なかったように感じられた。Dスコアを上げることばかりにとらわれずに、演技全体の質をもう一度高めるように見直していただきたい。

《つり輪》

D1： 吉田 義経

<決勝におけるDスコア分布(85名)>

6.2	5.9	5.8	5.7	5.6	5.5	5.4	5.2	5.1	5.0
1名	1名	2名	1名	1名	2名	4名	1名	3名	9名
4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.3	4.2	4.1	4.0
4名	6名	5名	4名	5名	4名	2名	2名	8名	3名
3.9	3.8	3.7	3.6	3.4	3.0				
5名	2名	5名	2名	2名	1名				

<決勝におけるEスコア分布(85名)>

8.85	8.70	8.65	8.55	8.50	8.40	8.30	8.25	8.20	8.15
1名	2名	1名	1名	2名	2名	4名	1名	2名	3名
8.10	8.05	8.00	7.95	7.90	7.85	7.80	7.75	7.70	7.65
1名	3名	4名	3名	3名	5名	5名	3名	3名	3名
7.60	7.55	7.50	7.45	7.40	7.35	7.30	7.25	7.20	7.15
3名	3名	2名	1名	2名	1名	1名	3名	3名	2名
7.10	7.05	6.80	6.70	6.45	6.40	6.25	5.85		
3名	3名	1名	1名	1名	1名	1名	1名		

<高校適用着地点>

	決勝のみ(2日間とも)
E 難度	1件 (1件)
D 難度	8件 (2件)
C 難度	11件 (4件)
計	20件 (7件)

<高校適用力静止技加点>

	決勝
0.4	2件
0.3	5件
0.2	12件
0.1	27件

<決勝における技数>

技数	
10技	50件
9技	31件
8技	4件
7技	0件

<決勝における高校適用加点対象となった技とその数>

難度	EG	技名	実施数
F	II	ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり中水平支持	1件
E	III	後ろ振り上がり中水平支持	7件
D	II	中水平支持	15件
	II	伸腕伸身逆上がり十字懸垂(アザリアン)	11件
	II	背面水平懸垂経過十字懸垂(ナカヤマ)	4件
	III	輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂(ホンマ十字懸垂)	36件

<決勝における上記以外の高難度技とその数>

難度	技名(グループ/実施数)
F	後方伸身2回宙返り2回ひねり下り(IV/2)
E	後方かかえこみ2回宙返り2回ひねり下り(IV/13)
D	ジョナサン(I/54)、伸身2回宙返り1回ひねり下り(IV/20)、 かかえ込み2回宙返り3/2ひねり下り(IV/13)、前方屈伸2回宙返り下り(IV/3)

<種目別上位3位選手の得点詳細>

第1位 金田 希一(3年)千葉県・市立船橋高校 D:6.2 E:8.65 決定点 14.850(内:規加点 0.4)

第2位 北園 丈琉(2年)大阪府・清風高校 D:5.6 E:8.85 決定点 14.450(内:規加点 0.2)

第3位 江俣有寿彩(2年)千葉県・市立船橋高校 D:5.8 E:8.50 決定点 14.300(内:規加点 0.3+着地加点)

<減点箇所とその傾向>

- ・静止が要求されるすべての技において、静止がみられなかったものは不認定とした。
- ・「後ろ振り上がり十字懸垂(ⅢC)」や、「け上がり十字懸垂(ⅢC)」において、持ち込む際に肘が大きくまがった実施は、その度合いにより不認定とした。
- ・「け上がり脚前拳支持(ⅢB)」において、け上がり支持の際に脚が大きく下がった後に脚前拳に持ち込んだ実施は、2技に分割して難度を認定した。また、け上がりの際に大きく肘がまがり力の使用により支持姿勢になった実施は、け上りを不認定とし、脚前拳支持(ⅡA)のみ認定した。
- ・「開脚水平支持」において、大きな腰まがりの実施は不認定とした。
- ・「後方車輪倒立:2秒(ⅠC)」や、「前方車輪倒立:2秒(ⅠC)」において、肘をまげて持ち込んだものであっても、振動技として認められる範囲内で難度を認定した(高校適用規則)が、倒立姿勢が維持できずに大きく肘や腰をまげた実施、逆方向に倒れた実施は不認定とした。
- ・「アザリアン、ナカヤマ(ⅡD)」において、正確性に欠ける姿勢や速すぎる捌きが多かった。各々0.1・0.3の減点で対応した。
- ・「中水平支持(ⅢE・ⅡD)」において、正しい位置から逸脱した姿勢減点が多かった。
- ・決勝においてD難度以上の力静止技を実施して内規加点を得た選手の数は、昨年大会と比べ5名減少した(一昨年42名、昨年51名、今年46名)が、総実施数は74技で昨年と同数であった。
- ・最大の加点は0.4であり、昨年大会の0.5には至らなかったが、Dスコアにおいては、昨年より0.1高い6.2であった。また、F難度(Ⅱ・Ⅳ)が3件実施されたことは評価したい。

<今後に向けて>

決勝出場者を班ごとに比較すると、D・E各スコア・加点数・技数・終末技難度の全てにおいて1班より2班、2班より3班が上回っていたことが数値として現れた。また、上位選手の技捌きは丁寧かつ正確であり、F難度を実施した3選手は種目別1位・2位・4位とそれぞれ高成績を収めた。

上記の検証結果からも、Dスコアを高めるために技数を10技へ、終末技をD難度へ、D難度の力静止技(高校適用加点)へと挑戦してもらいたい。また、Eスコアを高めるために、着地を止める(高校適用加点)ことや静止時間減点なしを確実にクリアすることが必須である。

つり輪の評価は、静止技における姿勢と時間、静止技に持ち込む際の角度や肘まがりに対するものが

大きく、減点項目も多い。しかしながら、得点を高めていくためには力静止技は必要不可欠であり、その中でいかに減点を減らすかが共通の課題となっている。静止時間における減点は中欠点もしくは不認定となる大欠点である。一方、姿勢に関する減点は、小・中・大欠点の項目がある。確実に2秒静止を守る中で、姿勢における減点を「中欠点→小欠点→減点なし」になるよう取り組んでほしい。

競技前の30秒アップ時間においては、昨年と同様に計時審判員を配置しての計測を行った。大半の選手監督が持ち時間の厳守を意識していたと感じた。

《跳馬》

D1：高橋 義憲

＜決勝における D スコア分布 (85 名)＞

5.6	5.2	4.8	4.4	4.0	3.6	3.2	2.8	2.4	2.2
2名	21名	28名	12名	19名	0名	0名	0名	0名	1名
2.0	1.6	0.0							
0名	1名	1名							

＜決勝における E スコア分布 (85 名)＞

9.25	9.20	9.15	9.10	9.05	9.00	8.95	8.90	8.85	8.80
1名	2名	1名	2名	0名	3名	2名	4名	3名	7名
8.75	8.70	8.65	8.60	8.55	8.50	8.45	8.40	8.35	8.30
4名	2名	5名	7名	6名	2名	5名	8名	4名	3名
8.25	8.20	8.15	8.10	8.05	8.0以下				
1名	2名	3名	0名	1名	7名				

＜実施された D スコア 5.2 以上の技とその数 (決勝)＞

5.6：ロペス (2名)

5.2：ドリックス (18名), 伸身クエルゴ 1回半ひねり (1名), 伸身ユルチェンコ 2回半ひねり (2名)

＜着地加点 (決勝)＞

85 演技中 7 演技

＜ラインオーバー＞

0.1 20 演技

0.3 4 演技

＜種目別上位 3 位選手の得点詳細＞

第 1 位 橋本 大輝 (3年) 千葉県・市立船橋 D：5.6 E：9.20 決定点 14.800

第 2 位 湯元 和志 (3年) 東京都・日体荏原 D：5.2 E：9.25 決定点 14.450

第 3 位 矢野 雄大 (2年) 大阪府・清風高校 D：5.2 E：9.20 決定点 14.400

<減点箇所とその傾向>

- ・第一局面での足の開き，膝のまがり
- ・第一局面での振り上げの歪み（倒立を経過していない）
- ・第2局面での高さ，姿勢，ひねり軸のぶれ，大きさ
- ・着地局面での明確にひねってからの着地の準備，着地姿勢の高さ

<今後に向けて>

5.2以上の技が増え順調なトレーニングが行えているというのを感じた。大半がグループ2からの跳越で第2局面にひねりを伴うものであった。Eスコアを見てみると第一局面で脚を閉じて振り上げを意識している選手も多く見られた。このような実施は全ての選手に見習って欲しい。第一局面での減点では他にも振り上げの際の膝の緩み，まがり，着手時の倒立の姿勢などがあった。特に着手時の倒立経過の姿勢では多くの選手が角度や歪み，曖昧な姿勢（側方なのか前方なのか）などが気になった。第2局面では，ひねりの姿勢（足の開き，膝のまがり・歪み，足の重なり），軸のブレなどの減点が多くあった。特に気になったのは高さ不足である。高いと感じた選手は数名ほどで更なるトレーニングが必要だと感じた。着地局面では，いかに準備態勢を整えて持ち込んでいるか，高い姿勢で着地が行えているか，そして止まったかという点で気になることが多かった。今大会予選で着地が止まったのは7演技，決勝でも7演技であった。また着地時におけるラインオーバーは85演技中24演技（0.1 20名 0.3 4名）であった。ライン減点の要因はさまざまな事が考えられる。再確認し今後のトレーニングに励んでもらいたい。

《平行棒》

D1：森 直樹

<決勝におけるDスコア分布（85名）>

6.3	6.0	5.8	5.7	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2	5.1
1名	1名	1名	1名	6名	1名	1名	5名	3名	7名
5.0	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.3	4.2	4.0
8名	2名	3名	7名	3名	5名	5名	6名	3名	2名
3.9	3.8	3.7	3.6	3.5	3.4	3.2	2.9	0.0	
1名	3名	3名	2名	1名	1名	1名	1名	1名	

<決勝におけるEスコア分布（85名）>

9.15	9.10	8.70	8.65	8.60	8.50	8.40	8.35	8.25	8.20
1名	1名	1名	1名	2名	1名	2名	2名	5名	3名
8.15	8.10	8.05	8.00	7.95	7.90	7.85	7.80	7.75	7.65
3名	5名	2名	4名	2名	3名	3名	2名	4名	2名
7.60	7.55	7.50	7.45	7.40	7.35	7.30	7.25	7.20	7.15以下
1名	2名	1名	2名	2名	2名	3名	1名	2名	20名

<着地加点>

	予選	決勝
F 難度	1 名	2 名
E 難度	1 名	0 名
D 難度	9 名	3 名
C 難度	6 名	1 名
B 難度	1 名	0 名
A 難度	13 名	0 名

<実施された高難度技とその数（決勝 85 名）>

F 難度：前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り（3 名）

E 難度：前方開脚宙返り抜き直接懸垂（3 名）、マクーツ（2 名）、バブサー（24 名）、棒下宙返りひねり倒立（9 名）、前方かかえ込み 2 回宙返り下り（1 名）

D 難度：ヒーリー（29 名）、ピータース（8 名）、前方宙返り開脚抜き腕支持（8 名）、ディアミドフ 1/4 ひねり（6 名）、後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持（16 名）、ハラダ（3 名）、チップルト（50 名）、棒下宙返り倒立（39 名）、懸垂前振り後方宙返りひねり腕支持（9 名）、バーレ（2 名）、後方屈身 2 回宙返り下り（70 名）

<種目別上位 3 位選手の得点詳細>

第 1 位 北園 丈琉（2 年） 大阪府・清風高校 D：6.3 E：9.10 決定点 15.400（着地加点有り）

第 2 位 土井 陵輔（3 年） 岡山県・関西高校 D：5.5 E：9.15 決定点 14.650

第 3 位 安達 太一（3 年） 千葉県・市立船橋 D：5.8 E：8.65 決定点 14.450（着地加点有り）

<減点箇所とその傾向>

- ・静止が要求されるすべての技において、静止がみられなかったものは大欠点とし、不認定とした。
- ・「チップルト（ⅢD）」において、倒立になる前に脚が下がったものは大欠点とし、不認定とした。
- ・「チップルト（ⅢD）」において、脚がバーに当たったものは器械上の落下として判定した。
- ・「ディアミドフ（ⅠC）」の終末局面において明確な支持姿勢を示さずに腕支持に持ち込んだものは大欠点とし、不認定とした。
- ・「ヒーリー（ⅠD）」や「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持（ⅡD）」において、支持の際にコントロールできずに肘が大きくまがった実施は大欠点とし、不認定とした。
- ・「前振り上がり（ⅡA）」や「け上がり（ⅢA）」において、大きさが見られないものは減点対象とした。
- ・懸垂時に足先が床面（マット上）に当たる実施が多かった。（触れた場合は-0.1、ぶつけた場合は-0.5。）

<今後に向けて>

今大会は高校生の大会であるにも関わらず、大学生や社会人選手と比べても見劣りしない演技実施や技捌きが多く見られ、また、高難度技を実施する選手の数も例年に比べ増え、日本の体操界の未来に明るい兆しが見られた大会であった。特にバブサー（E 難度）や棒下宙返りひねり倒立（E 難度）を実施した選手が増え、また、決勝において 85 名中 74 名の選手が D 難度以上の終末技を実施してきたことは特筆す

べき点である。一方、Eスコアに目を向けると、脚前拳支持（A 難度）や後ろ振り倒立（A 難度）、伸腕屈身力倒立（B 難度）など、2秒の静止が要求される技においての静止時間不足の減点（0.3 または 0.5）が多くみられた。これは下位選手だけに留まらず、上位選手においても同様に目立った減点箇所であった。また、前振り上がり（A 難度）やけ上がり（A 難度）といった基礎的な技においても、大きさ不足や膝のまがりで多くの選手が減点を被った。

近年の平行棒は、振動から倒立におさめる技において、静止できる倒立姿勢に持ち込む捌きが理想とされている。そのため、瞬時の静止がみられない、流れるような演技実施や技捌きは減点の対象となってしまう。今大会では特にディアミドフ（C 難度）や後方車輪倒立（C 難度）、棒下宙返り倒立（D 難度）において、明確な倒立姿勢を示さずに次の技に繋げる実施が多く目立った。それぞれの技の正確性と完成度が厳密に採点される現在の採点規則に対応すべく、高校生のうちから、各技の理想像に近づけるよう正しい技術の習得を目指していただきたいと強く感じた。

最後に、今大会を通してマナー面で気になった点の一つがあった。それは、昨年大会の報告書にも記載があった演技前の器械の準備をするタイミングについてである。前の選手の演技終了を待たずに、次の選手がマットに上がって準備を始めてしまうといった場面が多く多くの学校で散見された。「審判に挨拶するまでが演技」であり、他選手の演技終了前にマット（ポディウム）上に上がることは、他の参加者の権利を妨害することにもなる。また、前の選手に敬意を払う意味でも、演技を終了まで見届けてから自身の準備を始めるべきであると考えます。今後、監督・コーチの方々には、マナー面の指導も技術指導と合わせてしていただけることを切に願っている。

《鉄棒》

D1：花北 圭

<決勝における D スコア分布（85 名）>

6.0	5.9	5.8	5.7	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2	5.1
1 名	0 名	0 名	3 名	0 名	1 名	2 名	2 名	2 名	2 名
5.0	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.3	4.2	4.1
3 名	5 名	4 名	8 名	10 名	5 名	6 名	8 名	5 名	7 名
4.0	3.9	3.8	3.7	3.6	3.5	3.4	3.3	3.2	3.1
1 名	3 名	2 名	3 名	0 名	2 名	0 名	0 名	0 名	0 名

<決勝における E スコア分布（85 名）>

8.65	8.40	8.30	8.25	8.20	8.15	8.10	8.05	8.00	7.95
1 名	2 名	2 名	5 名	2 名	5 名	2 名	2 名	8 名	8 名
7.90	7.85	7.80	7.75	7.70	7.65	7.60	7.55	7.50	7.45
2 名	3 名	6 名	8 名	2 名	3 名	5 名	0 名	0 名	1 名
7.40	7.35	7.30	7.25	7.20	7.15	7.10	7.05	7.00	6.95 以下
1 名	2 名	3 名	1 名	1 名	1 名	1 名	1 名	0 名	7 名

<決勝における着地加点>

E 難度	6 名
D 難度	13 名
C 難度	2 名

<実施された高難度技とその数（決勝 85 名）>

G 難度：カッシーナ（3 名）

E 難度：コールマン（10 名）、伸身ピアッティ（3 名）、モズニク（1 名）、アドラー 1 回ひねり逆手倒立（4 名）、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り（18 名）

D 難度：順手背面車輪（9 名）、リバルコ（1 名）、ヤマワキ（70 名）、伸身トカチェフ（24 名）、コバチ（8 名）、リンチ（1 名）、アドラーひねり倒立（18 名）、シュタルダーとび 3/2 ひねり片大逆手（3 名）、エンドー 1 回ひねり大逆手（2 名）、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り（64 名）

<種目別上位 3 位選手の得点詳細>

第 1 位 北園 丈琉（2 年） 大阪府・清風高校 D：5.7 E：8.65 決定点 14.350（着地加点有り）

第 2 位 橋本 大輝（3 年） 千葉県・市立船橋 D：5.7 E：8.30 決定点 14.000

第 3 位 近藤 衛（3 年） 東京都・日体荏原 D：5.5 E：8.15 決定点 13.650

<減点箇所とその傾向>

- ・手放し技を片手で持った場合は、最終的に両手で持った時点か、他の技が明確に開始された場合に難度を認定する。
- ・ヤマワキにおいて、明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施は B 難度（ポローニン、後ろ振り上がり上向きとび越し懸垂）として判定した。
- ・後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下りにおいて、全経過大きく腰をまげた実施は後方屈身 2 回宙返り 1 回ひねり下り（IVC）として判定した。
- ・手放し技や終末技の前の車輪での膝まがり実施減点とした。
- ・後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂（Ⅲ81）は、後半の後ろ振り出しの局面で、腕と上半身の角度が 45 度に満たない場合は実施減点とした。

<今後に向けて>

数年前の報告書を振り返ると、手放し技は落下のリスクがあるため、実施を犠牲にしてまで高い難度の技を使おうとする演技は少なく、上位者であっても手放し技の数は 1～2 つであり、「3 つ 4 つ入った演技構成を目指してほしい」となっていた。今年度は、決勝 85 演技中、手放し技を 3 つ以上実施した選手は 23 名（27%）いた。高難度技を演技に入れていることに加え、落下及び器具上落下があった演技は 7 演技（85 演技中）と少なかったことは、「D スコアを高めつつ、安定した演技」という目指すべき方向に進んでいる証になったと感じた。

一方、単純な手のずらし、シュタルダーやエンドーでのつま先まがりや倒立からの逸脱、ひねりを伴う

技の倒立からの逸脱、手放し技や終末技前の車輪での膝まがりなどで減点される演技が多く、Eスコアでは課題が残った。特にシュタルダーやエンドーなどグループⅢの技は多くの選手が実施しているが、バーにつま先が当たる・つま先がまがる・つぶれた姿勢がなく力で倒立へ持ち込む・終末姿勢が倒立から逸脱する等、規定演技が廃止された影響が少しずつ出てきているのではないかと考えざるを得ない状況だった。

手放し技が増加してきたことは大変喜ばしい。今後は手放し技の完成度をさらに高め、組み合わせ加点を得られるような演技構成に挑戦する選手が増えることを期待したい。一方、高難度技を実施すれば車輪で膝をまげても許されるというルールは無い。そのため、高難度技を取り入れつつも、これまで以上に「美しい体操」を意識して練習に取り組んでもらいたい。

最後にマナーについて、演技終了後に着地マットを使用して柔軟等をする選手はいなかったが、種目移動のコール前に移動してきた選手がいた。近年はマナーについて男子体操競技情報への掲載や、会議におけるお願い等を行っていたため、浸透しているという思い込みがあった。誰もが気持ちよく演技し、応援するためにも、指導者の方々には引き続きマナーについて選手へのご指導をお願いしたい。